

【原 著】

幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園における  
「専門職の学習共同体」の醸成  
—教育・保育課程等編成のプロセスに着目して—

藤井 裕士 熊谷 愼之輔

Implementing a Professional Learning Community (PLC) at Early Childhood Education Institutions  
Focus on the Process of Curriculum Management

FUJII Yushi, KUMAGAI Shinnosuke

2023

岡山大学教師教育開発センター紀要 第13号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education  
and Development, Okayama University, Vol.13, March 2023

## 幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園における

## 「専門職の学習共同体」の醸成

## —教育・保育課程等編成のプロセスに着目して—

藤井 裕士※1 熊谷 慎之輔※2

本研究では、幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園において PLC 醸成をめざした際の、教育・保育課程等編成のプロセスを明らかにすることを目的とした。カリキュラム・マネジメントによる学校文化変革のプロセスと PTLC の関係性を整理した上で、PLC 醸成をめざしたカリキュラム編成のプロセスを示し、それをもとに、PLC 醸成にむけた教育・保育課程等編成のプロセスを示した。そして、『幼稚園教育要領解説』、『保育所保育指針解説』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』で示された教育・保育課程等編成の手順と比較し、プロセスやリーダーシップのあり方に関する違いが確認できた。

キーワード：専門職の学習共同体，専門性，教育・保育課程の編成

※1 倉敷市立倉敷支援学校

※2 岡山大学学術研究院教育学域

## はじめに

予測不可能な現代社会の中を、子ども達が生き抜く力を育むためには、教職員が学び続け、専門性を高める必要がある。教職員を中心とした多様な専門的な知識・技能を有した人々が、子ども達の学びと成長を第一の目的とし専門性を高め続けるために協働する概念として「専門職の学習共同体 (Professional Learning Community: PLC)」がある。PLC とは「子ども達の学びと成長のために持続的に学び合い、専門性を高め続ける教職員を中心とした集団」(熊谷・藤井 2019) である。これまでの PLC に関する研究 (DuFour 2008 ; Hipp & Huffman, 2010 ; Hord & Tobia, 2011 ; 織田 2014 ; 千々布 2014 ; 新谷 2014, 木原ら 2015 ; 露口 2015 ; 福島ら 2017 ; 坂田ら 2019) は、学校を対象に行われてきた。

一方で、幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園等の幼児教育施設に目を向けると、学校現場と同様に、専門職である職員ら<sup>1)</sup>が協働して子ども達の教育にあたっている。『保育所保育指針』には「第5章 職員の資質向上」として、「質の高い保育を展開するため、絶えず、一人一人の職員についての資質向上及び職員全体の専門性の向上を図るよう努めなければならない」と示されており、学校と同様に専門性の向上が重要な課題となっている。『幼稚園教育要領』及び『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』においてはそのよう

な直接的な記述は無いが、専門性の向上に努める必要があることに変わりはない。これらの幼児教育施設における多様な他者同士の協働や専門性の向上に関する課題に対しても、先に触れた PLC 論が援用可能であると考ええる。

それでは PLC は、どのようなプロセスで醸成されるのであろうか。PLC を創造するための戦略として、Hord & Tobia (2011) は、専門職の教授・学習サイクル (Professional Teaching & Learning Cycle :PTLC)を開発した。PTLC のサイクルが機能すれば、学校において PLC が醸成されることが期待できる。しかし、熊谷・藤井 (2019) は、PTLC のような組織における新たな取組に対しては例外なく成員からの抵抗を生み出すとし、Shein (2009) の文化の「学習／変容のモデル」をもとに、「カリキュラム・マネジメントによる学校文化変革のプロセス」(以下：学校文化変革のプロセス)を示している。それは、学校文化の変革を「変革の動機づけ」、「変革のための学習」、「再文化化」の 3 つの段階で示した PLC 醸成へむけたプロセスである。このプロセスと PTLC とは多くの類似点を含むがそれらの大きな違いは、学校文化変革のプロセスには「変革の動機づけ」段階で教職員の危機感を一時的に高めたうえでその危機を乗り越えるための見通しをもつプロセスがある点である。熊谷・藤井 (2019) は、「子どもの学びと成長」に焦点をあてながら、学校内外の現状を調査し、課題を把握、共有することが、「このままでは子どもたちの学びと成長に良くない状況である」と危機感をもつことにつながるとし、教職員が協働して子ども達の学びと成長に関与する課題や教育目標を明確にし、それを達成することができるカリキュラムを編成することが見通しとなると述べる。すなわち、幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園等の幼児教育施設についていえば、教育課程・保育課程・全体的な計画 (以下：教育・保育課程等)<sup>2)</sup>の編成が園<sup>3)</sup>における危機を乗り越える見通しとなり PLC 醸成の動機づけとなるということである。しかし、学校文化変革のプロセスには、カリキュラム編成に至る具体的なプロセスまでは言及されていない。その点については、先に述べた PTLC の中で具体的に示されており、カリキュラム編成を行ううえで大きな示唆を与えてくれる。

以上のように、学校を対象にした PLC 醸成をめざしたプロセスに関する研究は行われているが、学校文化変革のプロセスと PTLC との関連性が十分に検討された先行研究は無い。また、PLC 醸成をめざしたカリキュラム編成のプロセスは明確になっていない。更に、幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園を対象にした PLC 醸成に関する研究はこれまでに行われていない。そのため、幼児教育施設において PLC の醸成をめざしたカリキュラム編成に至る具体的なプロセスを示した研究もない。

そこで、本研究では幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園において PLC 醸成をめざした際の、教育・保育課程等編成のプロセスを明らかにすることを目的とする。その際、まずは学校文化変革のプロセスと PTLC の関係性を整理した上で、PLC 醸成をめざしたカリキュラム編成のプロセスを示す。そして、それをもとに、PLC 醸成にむけた教育・保育課程等編成のプロセスを示す。

## I 学校における PLC 醸成をめざしたカリキュラム編成のプロセス

### 1 「変革の動機づけ」段階における PTLC のステップと PLC 醸成をめざしたカリキュラム編成のプロセス

ここでは、学校文化変革のプロセスと PTLC の関係性を整理し、PLC 醸成をめざしたカリキュラム編成のプロセスを示した（表 1）。

学校文化変革のプロセスの第一段階「変革の動機づけ」には、PTLC の「ステップ 1：検討する」、「ステップ 2：選別する」、「ステップ 3：計画する」が対応する。

「ステップ 1：検討する」で記されている「子どもの学業到達データ」とは、子どもの学びや成長に関するデータと捉えることができる。「学習期待」とは、教育目標（めざす子ども像）と、「子ども達が学習すべき重要な概念や習得すべきスキル」とは、法令や学習指導要領で示される資質・能力等と捉えることができる。これらを踏まえて、カリキュラム編成のプロセスに置き換えると、この段階は「①カリキュラムのための検討」であり、「教職員らが学年やグループで、法令・学習指導要領等を踏まえて、子どもの学びや成長に関するデータや教育目標（めざす子ども像）について検討・議論を行う。その際、教職員らが教育・保育目標（めざす子ども像）、評価方法、現行のカリキュラムについて共通理解を図るために協働する」プロセスであるといえる。

「ステップ 2：選別する」で記されている「子どものスタンダード習得を促進するため」とは、大きく捉えると「教育目標（めざす子ども像）を達成にむけて」と言い換えることができる。また、「研究を基礎とした戦略」は、日本の学校の文脈では校内研究や校内研修に位置付けることができる。「効果的な学習支援のための戦略」とは、教育目標を達成するための教育内容・方法といえる。これらを踏まえて、カリキュラム編成のプロセスに置き換えると、この段階は「②カリキュラムのための選別」であり、「教職員らが教育目標（めざす子ども像）達成にむけて、校内研究・研修等に位置付け、教育内容・方法、学校・地域の教育資源、評価方法等に関する情報を収集し、選別する」プロセスであるといえる。

「ステップ 3：計画する」で記されている「授業の目的・教材・手順・期間、そして子どもが取り組む活動を概観する共通の公式計画」とはカリキュラムと捉えることができる。そして、「子どもの学習のどのようなエビデンスを収集するか」とは、評価規準と捉えることができる。これらを踏まえて、カリキュラム編成のプロセスに置き換えると、この段階は「③カリキュラムの組織」であり、「教職員らが協働的に選別した教育内容・方法、学校・地域の教育資源等からカリキュラムを組織し、評価規準を決定する」プロセスであるといえる。

「①カリキュラムのための検討」の段階は、子どもの学びや成長に関するデータから現状を把握、教育目標（めざす子ども像）についての検討・議論によって表面化した課題によって、教職員の危機感が一時的に高められる段階である。

表1 学校文化変革のプロセス及びPTLCをもとにしたカリキュラム編成のプロセス

学校文化変革のプロセス	PTLC	PLC 醸成をめざしたカリキュラム編成のプロセス
<p><u>第一段階：変革の動機づけ</u></p> <p>現状と課題の把握</p> <p>教育目標・ビジョン・めざす子ども像，学校経営計画，カリキュラム，評価方法等を見直す</p> <p>校務分掌，校内研究，校内研修等の組織構造を見直す</p>	<p>ステップ1：検討する</p> <p>教師たちが，子どもの学業到達データや学習期待を検討・議論するために，学年レベルないし教科部門チームで活動するプロセス。このプロセスにおいて，教師たちは，子ども達が学習すべき重要な概念や習得すべきスキル，学年ないし課程における評価方法，そしてカリキュラムの領域と系列について，共通理解を開発するために協働する。</p>	<p>①カリキュラムのための検討</p> <p>教職員らが学年や教科のグループで，法令・学習指導要領等を踏まえて，子どもの学びや成長に関するデータや教育目標（めざす子ども像）について検討・議論を行う。その際，教職員らが教育目標（めざす子ども像），評価方法，現行のカリキュラムについて共通理解を図るために協働する。</p>
	<p>ステップ2：選別する</p> <p>教師たちが，子どものスタンダード習得を促進するために，研究を基礎とした戦略や必要な資源を調査するプロセス。このプロセスにおいて，教師たちは効果的な学習支援のための戦略や，子どもの学習に関する根拠を提供するために用いられる評価技術を承認する。</p>	<p>②カリキュラムのための選別</p> <p>教職員らが教育目標（めざす子ども像）達成にむけて，校内研究・研修等に位置付け，教育内容・方法，学校・地域の教育資源，評価方法等に関する情報を収集し，選別する。</p>
	<p>ステップ3：計画する</p> <p>教師たちが，協働的に授業を計画するプロセス。このプロセスにおいて，教師たちは，授業の目的・教材・手順・期間，そして子どもが取り組む活動を概観する共通の公式計画を開発し，子どもの学習のどのようなエビデンスを収集するかを決定する。</p>	<p>③カリキュラムの組織</p> <p>教職員らが協働的に選別した教育内容・方法，学校・地域の教育資源等からカリキュラムを組織し，評価基準を決定する。</p>
<p><u>第二段階：変革のための学習</u></p> <p>経営活動：学校の一部の組織でモデルを示し，他組織が模倣する</p> <p>教育活動：校内研究等で，リーダーが新しい教育実践のモデルを示し，他模倣する各教職員が目標に向かって試行錯誤しながら新しい実践を行う。</p>	<p>ステップ4：実行する</p> <p>教師たちが，計画した授業を教え，成果と課題を書き留め，子どもの活動のエビデンスを収集するプロセス。このプロセスにおいて，教師たちは，連続的な自己評価や内的な対話を促進するための活発な省察を促進する。</p>	<p>④教育活動の実施</p> <p>教職員らが新たなカリキュラムに沿った教育活動を実施し，成果と課題を記録する。その際，連続的に自己評価や省察を行う。</p>
	<p>ステップ5：分析する</p> <p>教師たちが，授業の効果について対話・協議するプロセス。このプロセスにおいて，教師たちは，スタンダードの再検討・把握，子どもの活動のサンプルの分析，そして指導の強みや弱みや示唆についての推論のために協力して活動する。</p>	<p>⑤教育活動の評価</p> <p>教職員らが実施した教育活動について省察的な対話・協議を通して評価を行う。その際，教育目標（めざす子ども像）の再検討・把握，記録等をもとに子どもの活動の分析，教育方法・内容の評価のために協働する。</p>
	<p>ステップ6：調整する</p> <p>教師たちが，子どもの活動の分析から生じる示唆を省察するプロセス。このプロセスにおいて，教師たちは，お互いの授業経験を省察し，未来の指導のための戦略を検討・確認し，授業を洗練・改善する。</p>	<p>⑥カリキュラムの維持・改善</p> <p>教職員らが評価から得られた示唆を省察する。その際，教職員らが実施した教育活動について協働的に省察し，維持・改善点を今後の教育活動やカリキュラムに反映させる。</p>
<p><u>第三段階：再文化化</u></p> <p>評価による成果の意図化に個人及び組織内への取り込み</p>	<p>カリキュラムや組織の取り込み</p>	

熊谷・藤井（2019）の学校文化変革のプロセス，織田（2014）のPTLCのステップを一部改変し，カリキュラムの編成視点を加え作成

そして、「②カリキュラムのための選別」、「③カリキュラムの組織」によって教育目標（めざす子ども像）の達成が期待できる教育活動やカリキュラムが具体化されることで、危機を乗り越える見通しとなる。そのため、「①カリキュラムのための検討」から「③カリキュラムの組織」が一体的に行われることによって、「変革の動機づけ」となる。

## 2 「変革のための学習」段階における PTLC のステップと PLC 醸成をめざしたカリキュラム編成のプロセス

学校文化変革のプロセスの第二段階「変革のための学習」には、PTLC の「ステップ4：実行する」、「ステップ5：分析する」、「ステップ6：調整する」が対応する。

「ステップ4：実行する」で記されている「成果と課題を書き留め、子どもの活動のエビデンスを収集する」とは、記録と捉えることができる。この点を踏まえて、カリキュラム編成のプロセスに置き換えると、この段階は「④教育活動の実施」であり、「教職員らは、新たなカリキュラムに沿った教育活動を実施し、成果と課題を記録する。その際、連続的に自己評価や省察を行う」プロセスであるといえる。

「ステップ5：分析する」で記されている「授業の効果」は、評価によって判断することができる。「スタンダードの再検討・把握」を広義で「教育目標（めざす子ども像）の再検討・把握」と捉えると、それに関連する指導や教育内容・方法を評価し改善への示唆を得る段階である。これらの点を踏まえて、カリキュラム編成のプロセスに置き換えると、この段階は「⑤教育活動の評価」であり、「教職員らが実施した教育活動について省察的な対話・協議を通して評価を行う。その際、教育目標（めざす子ども像）の再検討・把握、記録等をもとに子どもの活動の分析、教育方法・内容の評価のために協働する」プロセスであるといえる。

「ステップ6：調整する」で記されている「子どもの活動の分析から生じる示唆」とは、評価から得られる示唆のことであり、この段階では教育活動全体を俯瞰的に省察することと捉えることができる。そのため、「お互いの授業経験を省察」するために、複数の教育活動の省察を行うこととなる。「未来の指導のための戦略」とはカリキュラムと捉えることもできる。「授業を洗練・改善する」ということを、維持・改善点を明らかにし教育活動やカリキュラムに反映させると捉える。これらの点を踏まえて、カリキュラム編成のプロセスに置き換えると、この段階は「⑥カリキュラムの維持・改善」であり、「教職員らが評価から得られた示唆を省察する。その際、教職員らが実施した教育活動につて協働的に省察し、今後の維持・改善点を教育活動やカリキュラムに反映させる。」プロセスであるといえる。

この、「④教育活動の実施」から「⑥カリキュラムの維持・改善」にかけてのプロセスは、「モデルの模倣や新たな実践の試行錯誤をとおして、教職員や学校組織が新しい考え方や価値観、行動様式を学ぶ機会」（熊谷・藤井 2019）

であり、それは「変革のための学習」と捉えることができる。

### 3 「再文化化」段階における PTLC の位置づけ

熊谷・藤井（2019）によると、学校文化変革のプロセスの第三段階「再文化化」とは、評価の際に学校として価値のあることに意味付けをし、言語化によって個人内及び組織構造へ取り込む段階である。新たなカリキュラムとして具体化され実施された教育活動を評価した際に、価値のある教育内容・方法に意味づけをし、文書等に取り込まれ維持された場合は、「再文化化」したことになる。

先程、「④教育活動の実施」から「カリキュラムの維持・改善」を「変革のための学習」の段階として捉えたが、見方を変えると、「教育活動の評価」、「カリキュラムの維持・改善」には評価と意味づけによる取り込みの機能があることから「再文化化」の段階と捉えることもできる。更に別の見方をすると、PTLC 全体を一つの経営活動として捉えるとすると、PTLC は学校文化変革の第二段階における新たな経営活動と捉えることもできる。PTLC の学校文化変革のプロセスへの厳密な位置づけは、現段階では困難であるが、PLC 醸成のための「再文化化」にむけて学校でめざすのは、PTLC のステップを学校文化として取り込むことではないだろうか。

### 4 PTLC におけるリーダーシップ

学校文化変革のプロセスと PTLC との違いの一つに、リーダーシップの役割の位置づけがある。PTLC においてはリーダーシップの役割が位置づけられている。織田（2014）は PTLC 全体を支援する重要な要素として、リーダーシップに関する次の3点を示している。

- ①明確な期待を伝える：リーダーが、自らの言動のなかで、PTLC の実行に対するコミット（例：全職員の参加、効果的な学習の機会、同僚との健全な関係の構築のための戦略として活用するという期待）を伝える。
- ②能力を構築する：リーダーが、支援を必要とする成員を認識して、適時に支援を行うとともに、必要に応じた資源（例：協働のための時間、指導コーチや内容専門家からの支援）の提供を通じて、教師の能力を高める。
- ③監督・批評する：リーダーが、チーム内で生じる協働の効果を監督し、反省的な問いを求め、必要な資源を提供し、指導改善への焦点を維持し、必要な場合は介入する。

「PTLC の主たる焦点は教室実践にあるが、効果的なティーチングのための責任は、教室レベルに限定されるものではなく、継続的な同僚の相互作用やリーダーシップを必要とする」（織田 2014）。PTLC の取組の成功のカギを握るの

は、こうした取組を支援し促進するリーダーシップにある。そういった意味でも、リーダーシップに関する視点は、PLC 醸成にむけたカリキュラム編成においても取り入れたい。

## II 幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園における PLC 醸成をめざした教育・保育課程等編成のプロセス

### 1 PLC 醸成をめざした教育・保育課程等編成のプロセス

ここでは、PLC 醸成をめざしたカリキュラム編成のプロセスをもとに、幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園における教育・保育課程等編成のプロセスを示した（表2）。PLC 醸成をめざしたカリキュラム編成のプロセスは、学校全般を対象にしたものである。そのため、幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園に適した言葉の表現に置き換える必要がある。例えば、PLC 醸成をめざしたカリキュラム編成のプロセスで使用した「カリキュラム」「教職員」「教育」「学校」といった言葉は、それぞれ「教育・保育課程等」「職員」「教育・保育」「園」という言葉に置き換えた。そして、『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』及び各解説と関連付けながら、教育・保育課程等編成のプロセスの内容について言及した。

#### （1）教育・保育課程等のための検討

この段階は「①教育・保育課程等のための検討」であり、「職員らが担当年齢等のグループで、法令、『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』（資質・能力、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿）等を踏まえて、子どもの学びや成長に関するデータや教育・保育目標（めざす子ども像）について検討・議論を行う。その際、職員らが教育・保育目標（めざす子ども像）、評価方法、現行の教育・保育課程等について共通理解を図るために協働する」プロセスである。

まず、職員らが教育・保育課程等のために協働的に評価等を通して情報収集を行うことで教育・保育課程等の編成に必要な事項について共通理解を図る。子ども実態を把握するにあたって評価を行うことについて、『幼稚園教育要領』及び『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』には「他の幼児との比較や一定の基準に対する達成度についての評定によって捉えるものではないことに留意すること」と記されている。それでは、どのように評価を行えばよいのだろうか。『幼稚園教育要領』及び『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』では、「指導の過程を振り返りながら」子どもの理解を進めることが記されている。また、『保育所保育指針』では、評価について「保育士等の自己評価」、「保育所の自己評価」という形で記されており、「保育の計画や保育の記録を通して」自らの保育実践振り返ることや、「自己評価にあたっては、子どもの活動内容やその結果だけでなく、子どもの心の育ちや意欲、取り組む過程などにも十分に配慮するよう留意する」ことが記されている。それは、子どもの姿、指導計画や記録等をもとに教育・保育内容や指導の過程を評価し、子どもや園



表2 幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園において PLC 醸成をめざした教育・保育課程等編成のプロセス

<b>PLC 醸成をめざした 教育・保育課程等編成のプロセス</b>
①教育・保育課程等のための検討 職員らが担当年齢等のグループで、法令、『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』（資質・能力、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿）等を踏まえて、子どもの学びや成長に関するデータや教育・保育目標（めざす子ども像）について検討・議論を行う。その際、職員らが教育・保育目標（めざす子ども像）、評価方法、現行の教育・保育課程等について共通理解を図るために協働する。
②教育・保育課程等のための選別 職員らが教育・保育目標（めざす子ども像）達成にむけて、園の研究・研修等に位置付け、教育・保育内容及び方法、園・地域の教育・保育資源、評価方法等に関する情報を収集し、選別する。
③教育・保育課程等の組織 職員らが協働的に選別した教育・保育内容及び方法、園・地域の教育・保育資源等から教育・保育課程等を組織し、評価規準を決定する。
④教育・保育の実施 職員らが新たな教育・保育課程等に沿った教育・保育を実施し、成果と課題を記録する。その際、連続的に自己評価や省察を行う。
⑤教育・保育の評価 職員らが実施した教育・保育について省察的な対話・協議を通して評価を行う。その際、教育・保育目標（めざす子ども像）の再検討・把握、記録等をもとに子どもの活動の分析、教育・保育方法及び内容の評価のために協働する。
⑥教育・保育課程等の維持・改善 職員らが評価から得られた示唆を省察する。その際、職員らが実施した教育・保育について協働的に省察し、維持・改善点を今後の教育・保育や教育・保育課程等に反映させる。
留意事項： ・①～③のプロセスは、一体的に行う。 ・取組を支援・促進するリーダーシップが必要。

の実態を把握することといえる。実際、『幼稚園教育要領』及び『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』には、「園に累積されている資料などから園児の発達過程や実情を的確に把握する必要がある」と記されている。

そして、職員らが協働的に教育・保育目標（めざす子ども像）を明確にし、共通理解を図る必要がある。『幼稚園教育要領』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』では、「育みたい資質・能力を踏まえて」各園の教育・保育目標を明確にすることが記されている。それでは、育みたい資質・能力とはいったいどのような姿なのだろうか。幼児教育施設修了時に資質・能力が育まれている子どもの具体的な姿として、『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の全てに共通して示されているのが「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」である。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として、「健康な心と体」、「自立心」、「協同性」、「道徳性・規範意識の芽生え」、「社会生活との関わり」、「思考力の芽生え」、「自然との関わり・生命尊重」、「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」、「言葉による伝え合い」、「豊かな感性と表現」の10の姿が示されている。教育・保育目標（めざす子ども像）を明確にする際に、育みたい資質・能力を踏まえるとは、この「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえることと捉えることができる。

## （２）教育・保育課程等のための選別

この段階は「②教育・保育課程等のための選別」，「職員らが教育・保育目標（めざす子ども像）達成にむけて，園の研究・研修等に位置付け，教育・保育内容及び方法，園・地域の教育・保育資源，評価方法等に関する情報を収集し，選別する」プロセスである。

『保育所保育指針』には，「職場における研修等」として以下の様に記されている。

職員が日々の保育実践を通じて，必要な知識及び技術の修得，維持及び向上を図るとともに，保育の課題等への共通理解や協働性を高め，保育所全体として保育の質の向上を図っていくためには，日常的に職員同士が主体的に学び合う姿勢と環境が重要であり，職場内での研修の充実が図られなければならない。

教育・保育目標（めざす子ども像）は，保育の重要な課題である。その達成にむけて教育・保育課程等を組織し実施するにあたって，研究・研修の充実が必要となる。また，教育・保育課程等を組織するには教育・保育内容及び方法を選別する必要がある。しかし，そのためには，『幼稚園教育要領解説』及び『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』に記されているように，「園生活の全体を通して，園児がどのような発達をするのか，どの時期にどのような生活が展開されるのかなどの発達の節目を探り，長期的に発達を見通す」ことが必要となる。幼児の発達の過程を知ることは，教育・保育内容及び方法を選別するために重要な情報となる。

更に，教育・保育内容及び方法を選別し教育・保育課程等を組織するためには，更に，職員らが園や地域の教育資源を把握する必要がある。『幼稚園教育要領解説』及び『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』においても，「園や地域の実態」を把握することが記されており，園や地域の物的環境，人的環境等の教育資源に関する情報も含めて把握を行うことで，教育・保育目標（めざす子ども像）を指標としながら，必要な資源の選別を行うことが可能となる。

## （３）教育・保育課程等の組織

この段階は「③教育・保育課程等の組織」であり，「職員らが協働的に選別した教育・保育内容及び方法，園・地域の教育・保育資源等から教育・保育課程等を組織し，評価規準を決定する」プロセスである。

保育所・幼保連携型認定こども園において教育・保育課程を組織するという事は，『幼稚園教育要領解説』，『保育所保育指針解説』及び『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』に共通して記されているように，具体的なねらいと内容を組織するという事である。『幼稚園教育要領』には「『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を踏まえて教育課程を編成する」ことが記さ

れている。また、『幼稚園教育要領』には、「第 2 章に示すねらいが総合的に達成されるように、教育課程に係る教育期間や幼児の生活経験や発達の過程などを考慮して具体的なねらいと内容を組織する」とされている。この「第 2 章に示すねらい」とは、「育みたい資質・能力を幼児の生活する姿から捉えたもの」である。また、内容は、「②教育・保育課程等のための選別」において選別した教育・保育資源を踏まえて組織することになる。この点については、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』においても同様の記述が見られる。

また、評価とは「①教育・保育課程等のための検討」で述べたように、子どもの姿、指導計画、記録等によって行われる。その為、ここでいう評価規準とは、子どもの姿、指導計画、記録等を振り返る際の視点である。その際に、例えば、教育・保育目標（めざす子ども像）が評価を行う際の指標となる。

#### （４）教育・保育の実施

この段階は「④教育・保育の実施」であり、「職員らが新たな教育・保育課程等に沿った教育・保育を実施し、成果と課題を記録する。その際、連続的に自己評価や省察を行う」プロセスである。

この段階における自己評価や省察とは、教育・保育を実施した職員が自ら省みることによって行われる。ここでの自己評価は、「①教育・保育課程等のための検討」で触れた自己評価と同様である。

#### （５）教育・保育の評価

この段階は「⑤教育・保育の評価」であり、「職員らが実施した教育・保育について省察的な対話・協議を通して評価を行う。その際、教育・保育目標（めざす子ども像）の再検討・把握、記録等をもとに子どもの活動の分析、教育・保育方法及び内容の評価のために協働する」プロセスである。

評価の具体的な方法については、「①教育・保育課程等のための検討」で触れた内容と同様である。この段階の評価と「④教育・保育の実施段階における評価」との違いは、④の評価が自己評価と個人による省察が中心であったのに対して、この段階では職員間で協働的に行うという点である。

#### （６）教育・保育課程等の維持・改善

この段階は「⑥教育・保育課程等の維持・改善」であり、「職員らが評価から得られた示唆を省察する。その際、職員らが実施した教育・保育につて協働的に省察し、維持・改善点を今後の教育・保育や教育・保育課程等に反映させる」プロセスである。

評価から得られた示唆とは、教育・保育の成果と課題である。成果は維持し、課題は改善を行う必要がある。ただし、『幼稚園教育要領解説』及び『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』に共通して示されているように、「指導計画で設定した具体的なねらいや内容などのように、比較的直ちに修正でき

のものもあれば、人的・物的条件のように、比較的長期の見通しの下に改善の努力をしなければならぬものもある」。とりわけ、改善には時間を要する場合もある。どちらにせよ、維持・改善の持続可能性を高めるために、明文化等により教育・保育課程に取り入れる等の工夫が必要である。

## 2 PLC 醸成をめざした教育・保育課程等の編成における留意事項

ここでは、PLC 醸成をめざした教育・保育課程等の編成における留意事項について言及する。

PLC 醸成をめざしたカリキュラム編成のプロセスと同様に、PLC 醸成をめざした教育・保育課程等編成のプロセスにおいても、「①教育・保育課程等のための検討」の段階で、園や子どもの課題を浮き彫りにすることが、危機感を高めることにつながる。そして、「②教育・保育課程等のための選別」及び「③教育・保育課程等の組織」が危機を乗り越える見通しとなる。これらの①から③のプロセスが一体的に行われることによって、「変革の動機づけ」となる。そのため、留意事項として「①～③のプロセスは、一体的に行う」ことを示した。

また、PLC 醸成をめざした教育・保育課程等編成のプロセスを推進する際にも、PTLC と同様に織田（2014）が示した①明確な期待を伝える、②能力を構築する、③監督・批評する、といった取組を支援・促進するリーダーシップが重要な役割を果たす。そのため、留意事項に「取組を支援・促進するリーダーシップが必要」であることを示した。

### おわりに

本研究では、幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園において PLC 醸成をめざした際の、教育・保育課程等編成のプロセスを明らかにすることを目的とし、まず、学校文化変革のプロセスと PTLC の関係性を整理した上で、PLC 醸成をめざしたカリキュラム編成のプロセスを示した。そして、PLC 醸成をめざしたカリキュラム編成のプロセスをもとに幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園における PLC 醸成をめざした教育・保育課程等編成のプロセスを示した。「PTLC は、1. 教授・学習における協働、2. 教室実践に影響力を持つ職務に埋め込まれた職能発達、3. 教授学習の改善のためのリーダーシップ、に適した実践的で実行可能な戦略を表現するものである」（織田 2014）。この戦略は、PLC 醸成をめざしたカリキュラム編成及び PLC 醸成をめざした教育・保育課程等編成のプロセスにも反映された。教育・保育課程等の編成が職員らによって協働的に行われること、また、教育・保育課程編成が協働的に行われる中で職員が学び合い専門性を高めること、そして、それらを支援し促進するためのリーダーシップのあり方を含めて提示することができた。

『幼稚園教育要領解説』、『保育所保育指針解説』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』においても、それぞれ教育・保育課程等に関する編成

の手順の「例」が示されている。それらの手順と本研究で示した PLC 醸成をめざした教育・保育課程等編成のプロセスとを比較した結果、わずかな違いが見られた。それは、『幼稚園教育要領解説』、『保育所保育指針解説』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』では、現状を把握するプロセス、教育・保育目標（めざす子ども像）を明確にするプロセス、カリキュラムを組織するプロセスが別々に示されているが、本研究で示したプロセスではそれらを一体的に行うという点である。PLC 醸成をめざして園文化を変革するには、現状を把握し、課題を表面化することによって危機感を一度高めたうえで課題解決の見通しとして、教育・保育目標（めざす子ども像）の明確化と教育・保育課程等の組織が一体的に行われる必要がある。その点においては、本研究で示したプロセスは、『幼稚園教育要領解説』等で示された手順よりも、PLC 醸成により特化したプロセスであるといえる。

また、教育・保育課程を編成する上でのリーダーシップについて、『幼稚園教育要領解説』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』では、「園長の責任において」と記される程度で具体的な在り方については言及されていない。しかし、本研究では、教育・保育課程編成を支援・促進するリーダーシップのあり方について示すことができた。

一方で、本研究では、教育・保育目標（めざす子ども像）を明確にする際に、資質・能力や幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえることには言及したが、子育て支援等の目標については言及していない。幼児教育施設が子育て支援センターとしての機能を発揮するために、地域の子ども達を含めた子育て支援に関して教育・保育課程等を編成する際にどのように扱っていくかは、PLC 醸成をめざしたカリキュラム編成のプロセスにおける課題である。

今後、本研究で提案した、PLC 醸成をめざした教育・保育課程等編成のプロセスをもとに、実践研究を行い、更なる理論の精緻化と、実践事例の蓄積に努めたい。

## 参考・引用文献

- DuFour, R., DuFour, R., & Eaker, R., *Revisiting Professional Learning Communities at Work : New Insights for Improving Schools*, Solution Tree, 2008.
- E. H. シャイン（尾川丈一監訳，松本未央訳）『企業文化ーダイバーシティと文化の仕組みー』（*The Corporate Culture Survival Guide*, John Wiley & Sons, 2009），白桃書房，2016年。
- Hipp, K. K. & Huffman, J. B. (eds.), *Demystifying Professional Learning Communities : School Leadership at its best*, Rowman & Littlefield Education, 2010.
- Hord, S. M. & Tobia, E. F., *Reclaiming Our Teaching Profession: The Power of Educators Learning in Community*, Teachers College Press, 2011.

- 織田泰幸「「専門職の学習共同体」としての学校に関する基礎研究（2）—ツール活用をめぐる—」『三重大学教育学部研究紀要第 65 巻教育科学』, 2014 年, pp. 365-379。
- 木原俊行, 島田望, 寺嶋浩介「学校における実践研究の発展要因の構造に関するモデルの開発—「専門的な学習共同体」の発展に関する知見を参照して—」日本教育工学会論文誌 39 巻, 2015 年, pp. 167-179。
- 熊谷慎之輔, 藤井裕士「『専門職の学習共同体』としての学校の実現をめざしたカリキュラム・マネジメントに関する基礎研究—カリキュラム・マネジメントのプロセスに着目して—」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』, 第 172 号, 2019 年, pp. 1-9。
- 厚生労働省『保育所保育指針』フレーベル館, 2017 年。
- 厚生労働省『保育所保育指針解説』フレーベル館, 2018 年。
- 坂田哲人, 町支大祐, 中田正弘, 脇本健弘, 湯浅且敏「教師効力に感影響をおよぼす専門職の学習共同体の構成要因に関する分析」青山インフォメーション・サイエンス vol. 47, 2019 年, pp. 16-23。
- 汐見稔幸「保育所保育指針」無藤隆, 汐見稔幸, 砂上史子『ここがポイント 3 法令ガイドブック』フレーベル館, 2017 年, pp. 75-174。
- 新谷龍太郎「米国における『専門職の学習共同体 (Professional Learning Communities : PLCs)』の検討: デュフォーのモデルを発展させた中学校の事例を通して」日本教育経営学会紀要 56 巻, 2014 年, pp. 68-81。
- 千々布敏弥『プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティによる学校再生 日本にいる「青い鳥」』教育出版, 2014 年。
- 露口健司「専門的な学習共同体 (PLC) が教師の授業力に及ぼす影響のマルチレベル分析」日本教育経営学会紀要 55 巻, 2013 年, pp. 66-81。
- 内閣府, 文部科学省, 厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』フレーベル館, 2017 年。
- 内閣府, 文部科学省, 厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館, 2018 年。
- 福嶋真治, 佐々木織恵, 大庭梓, 栗田晃宏「専門職の学習共同体 (PLC) の構成要因に関する検討」『東京大学大学院教育学研究科教育行政学論叢』第 37 号, 2017 年, pp. 109-131。
- 文部科学省『幼稚園教育要領』フレーベル館, 2017 年。
- 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館, 2018 年。

## 註

- 1) 施設によって, 保育者の呼称が異なり教諭, 保育士, 保育教諭等がある。また, 幼稚園・幼保連携型認定こども園には, 養護教諭, 栄養教諭, 事務職員養護助教諭, その他必要な職員が, 保育所には看護師, 調理員, 栄養士等が在籍することもある。そこで, 本稿ではそれらの幼児教育施設に在籍する者を総称して, 職員と呼ぶこととした。

- 2) 幼稚園では教育課程が作成される。汐見（2017）によると、教育課程とは学校の目標、すなわち目指すべき子ども像や身に付けさせたい能力や資質、そして、それを具体化するための教育の基本計画、その評価の方法等をかいた文書と説明している。そして、汐見（2017）は保育所でそれにあたるのが保育課程であるとしている。現在の『幼稚園教育要領』においては、学校保健計画、学校安全計画等と関連させて、『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』においては、保健計画、食育計画などを含んだ「全体的な計画」を作成することが明記されている。汐見（2017）は「『全体的な計画すなわち保育課程』といえはわかりやすい」と述べている。
- 3) 保育所は、保育園という名称で使用されることもある。ここでは、幼稚園・保育所・認定こども園を略して表す際に「園」を用いることとした。

---

Implementing a Professional Learning Community(PLC) at Early Childhood Education Institutions

Focus on the Process of Curriculum Management

FUJII Yushi \*1, KUMAGAI Shinnosuke \*2

Keywords: Professional Learning Community, Expertise, Curriculum Management

\*1 Kurashiki Municipal Kurashiki Special Needs School

\*2 Faculty of Education, Okayama University

---